

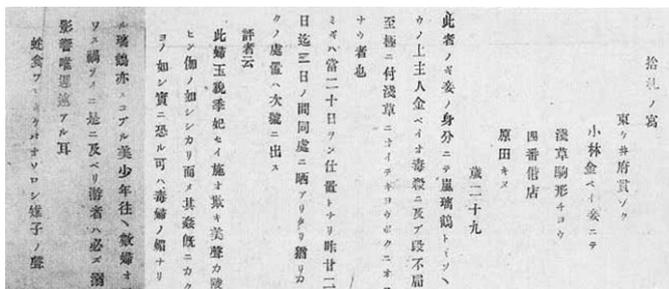
明治の新聞人「操觚者」たちの心意気

【操觚者（そうこしゃ）】文筆に従事する人。著述者、編集者、新聞・雑誌の記者など。元学芸部編集委員・筑波大学教授の嶺隆さん（67 年入社）は『新聞人群像—操觚者たちの闘い』（中央公論新社 2007 年刊）で明治時代のジャーナリストの心意気を紹介している。

本文の書き出しは——。《明治九年（一八七六）六月二十八日午後、東京・浅草寺本堂で「新聞供養大施餓鬼会」と称する奇妙な法要が営まれた。東京、横浜の新聞記者たちが一堂に会して新聞を供養するというのである》

明治 5（1872）年、「東京日日新聞」をはじめ全国で創刊された新聞は 38 紙、翌 6 年に 40 紙。新聞創刊ラッシュが全国に波及した、とある。

「東京日日新聞」は創刊第 3 号（2 月 23 日）で「夜嵐お絹事件」を報じた。捨札（高札）の写しとうたっているが、この記事のきっかけは、江藤新平（のちの司法卿）が「東京日日新聞」発行元の条野伝平宅を訪れ、新聞の創刊を祝い「明日から配達を」と頼んだ。その際、条野が「裁判済みの事件については公表を」と訴え、それが実現したのだ。

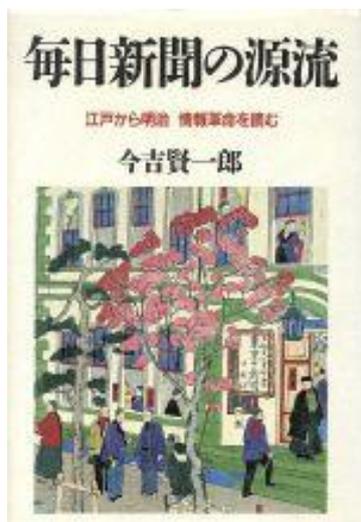


夜嵐お絹事件」の新聞錦絵

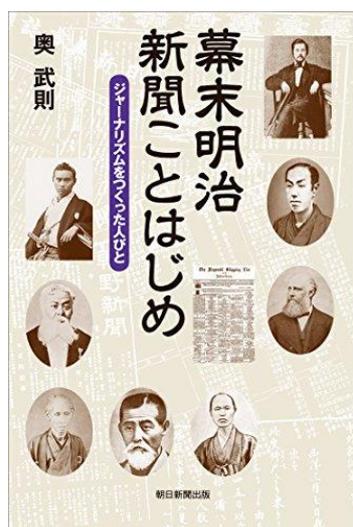
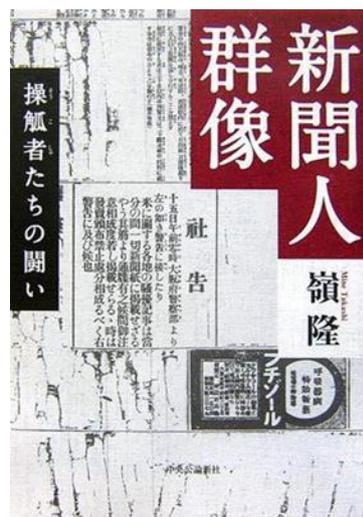
一方、政府は 1875（明治 8）年 6 月、「新聞紙条例」「讒謗律」を制定して、言論規制・弾圧を図る。この 2 法の制定により投獄された記者は翌 76 年上期までに 46 人にのぼり、「新聞供養大施餓鬼会」につながった。

《導師以下 37 人の僧侶による読経に続いて、各新聞を代表する記者が次々に立って焼香し、思い思いの祭文を読み上げた》《24 人の新聞記者が読み上げた祭文は…各紙が自社代表の祭文を紙面に掲載した》

嶺さんは「現代ジャーナリズムが失いかけている操觚者の矜持」を訴え、「肝要なことは、ジャーナリズム本来の批判精神を失わないことである」と。



毎友会旧友の関連出版物。今吉賢一郎著『毎日新聞の源流—江戸から東京 情報革命を読む』（毎日新聞社 1988 年刊）、



奥武則著『幕末明治 新聞ことはじめ ジャーナリズムをつくった人びと』（朝日選書、朝日新聞出版 2016 年刊）。奥さんは元学芸部長・「余録」筆者、元法政大学教授。

(堤 哲)